

# USC 研修に参加して

---

薬学部薬学科 110973328 清水 萌

平成 27 年 7 月 26 日から 8 月 9 日までの 2 週間、日本からは名城大学、名古屋市立大学、昭和薬科大学、富山大学、韓国からは徳成女子大学、淑明女子大学の計 40 名とともに USC での研修に参加しました。名城大学へ入学した 1 年生の時にこのようなプログラムがあることを知り、日本の薬剤師とアメリカの薬剤師の違い、薬剤師という職業の位置付の違い、アメリカの薬学生がどのような生活を過ごしているか非常に興味がありました。また、今年の 1 期（5 月～7 月）に薬局で実務実習を行っていたのでアメリカと日本の薬局の違いを自分の目で確認できる良い機会だと思い、今回の研修への参加を志望しました。

実際に USC へ行ってみると大学の敷地内に 4 つもの医療施設があり、その施設内にて USC の薬学生が実務実習を行っていたり、薬学部との連携が密にとったりすることができる環境が整っていました。

Wincror 先生からの USC の概要について説明を受け、USC の学生から学生が日々をどのように過ごしているのかを知ることができました。日本では薬局と病院とで、各 2 か月半の実務実習を行い、臨床的な現場で調剤や服薬指導の経験をするのが薬学生のカリキュラムとなっているが、アメリカの病院実習では各科を 6 週ずつ回り、より臨床的な実習を行っているようでした。また薬学部の制度も日本とは大きく異なり、まず、2 年または 4 年の Pre Pharmacy で基礎的なことを学び、Pharmacy School (Pharm D) で 4 年かけて臨床的なことを学ぶとのことでした。この研修を同じように受けていた韓国の学生たちもアメリカと同様の制度とのことでした。

1 週目に Wincror 先生による SOAP Notes の書き方や、精神科に焦点を当てたカウンセリングの授業、精神状態の指標についての授業を受け、USC の大学内にある Plaza Pharmacy、USC Keck Medical Center、USC Norris Cancer Center の 3 か所へ見学、2 週目はおもに USC の学生の講義を受け、学生同士でグループディスカッションを行いました。また、校外にある El Monte Independent Community Pharmacy へ見学に行きました。

Plaza Pharmacy では USC の学生が薬局内を案内してくださいました。1 日の処方箋枚数は約 300-400 枚/日で、ピッキングはすべて機械で行っており、初めて見る光景に驚きを隠すことができませんでした。アメリカではリフィル処方箋が普及しているため、薬を渡すのみの患者さんが多いとのことでした。また、日本とは違ってヒートシール包装ではなく、ほぼすべての薬がボトルの中に入っていました。1 つの薬に対して、1 つのボトルに調剤するとのことで、日本のように 1 包化する光景は見られませんでした。1 包化についての質問が出ましたが、ほとんどしないとのことで、10 種類以上の薬を服用している人は家にボトルが 10 本以上置いてあるそうです。また、薬剤師によってワクチン接種やビタミンの接種が可能ということで、日本の薬剤師が行っている調剤等はすべてテクニシャンと呼ばれる薬剤師免許を持っていない人が行っていて、薬剤師は初回のカウンセリングや鑑査に力を入れているという印象を持ちました。

Keck Medical Center では、実際に働いている薬剤師の先生から話を聞くことができましたが、1 つの部屋で座って話を聞くというスタイルだったため、実際の現場の姿は見るこ

ができず、少し残念でした。医師の処方せんに在庫のない薬剤が書かれていたら、薬剤師が医師の許可なく類似薬へ処方変更することができることや、病院内の巡回に薬剤師も加わること、疾病別にプロトコールを作成しているという話を聞くことができました。また、医療用マリファナについて法律的な裏付けが必要なので弁護士も病院内の会議に加わるという、アメリカならではの工夫が行われていました。

USC Norris Cancer Center はがん専門病院であり、1階が外来患者、2階が治験関係、3階が入院患者のための薬剤部があり、今回は1階の外来患者がいるエリアと、抗がん剤の調製の現場を見学させていただきました。抗がん剤の調製はインターンの薬学部生(2年生)とテクニシャンが行っており、隣の部屋で薬剤師が鑑査をしていました。外来患者のエリアは2つに分かれていて椅子に座って腰かけながら抗がん剤の処置を受ける患者さんと、ベッドで横たわって処置を受けるエリアがありました。これは重症度ももちろん関係しているのですが、アメリカの医療保険制度も関与していて、日本のように国民皆保険ではないため、時間や対応によって医療費が大変異なってくる患者さんもいるためだそうです。

El Monte Independent Community Pharmacy では Plaza Pharmacy で聞くことができなかったピッキングマシンのより詳しい説明と営業中で実際に患者さんへの対応を行っている生の現場の姿を見ることができました。ピッキングマシンがミスをするところがあるのではないかと、また故障することはないのだろうかという疑問に対して薬剤の補充はすべてバーコードで管理しており、もし、入れ間違えても機械がミスを認識して動かなくなるという仕組みになっているそうです。また、6か月おきに機械のメンテナンスを行っており、万全な状況を整えるようにしておっしゃっていました。薬の配達を無料で行っており、何か患者から問い合わせがあった場合は、すべて電話で対応するとのことでした。鑑査も機械で行っており薬の形状や重さで判断するとのことと先端技術の進歩に感動しましたが、もしこのような機械や制度がもし日本に浸透したら、薬剤師のいない未来が待っていると危機感を感じました。

Wincor 先生による SOAP の授業や患者カウンセリングは、日本で習ったこととほとんど似ていると感じたのですが、精神状態の指標についての授業はより臨床的で興味深いものでした。Mental Status Exam(MSE)は Appearance, Behavior, Feeling, Perception, Thinking の5つに分類されていて見た目や姿勢、話している様子や妥当性、幻覚を見ないかどうか意識レベルを確認するために簡単なテストを行い、答えられた問題数によって点数付けを行うなど、医師の診断のような授業を受けました。また、アメリカならではの感じたのはドラッグを行っている注射痕を隠すために入れ墨を入れている人が多いので腕や指に入れ墨が入っていたら確認するようとおっしゃっていたのが印象的でした。アメリカの処方箋には日本とは違い、患者の疾患名が記載されており、より深い内容を患者から聞き出すことができるようになっていてカウンセリングの重要性について学ぶことができました。1週目に習った患者への服薬カウンセリングをもとに、2週目で行ったグループワークで結論出した薬剤でカウンセリングを行ったりして、将来、臨床的な現場に適

応できるための授業をアメリカの薬学生は行っているのだと感じました。

この2週間で感じたのはアメリカの薬剤師、薬学生、韓国の薬学生の積極性の高さです。日本の薬剤師や薬学生は細かな点を配慮できる力を持っているのに、遠慮からか積極性には少し欠けていると感じました。この貴重な体験を思い出にせず、これからの実務実習や、将来自分が薬剤師になった時に生かしていきたいです。